

【報告】

平成 26 年度国立大学図書館協会海外派遣事業報告：フランスの図書館を訪ねて

柴田育子（学術情報課電子情報係）

一橋大学学術・図書部

はじめに

2014年10月の1週間、国立大学図書館協会の海外派遣事業でフランスのコンソーシアム活動について調査する機会をいただいた。約1週間、フランスのパリにある Couperin (Couperin: Consortium universitaire des publications numériques) 事務局、モンペリエにある ABES (Agence bibliographique de l'enseignement supérieur : 高等教育書誌センター) を訪ね、担当者よりフランスの大学図書館やコンソーシアム活動について話を聞く機会を得た。それと同時に Couperin の André Dazy 氏、ABES の Carole Melzac 氏のご厚意で、フランス国立図書館やパリ市内、モンペリエ市内の大学図書館を訪問、見学する機会を得た。本稿はそのフランスの国立および大学図書館の訪問について書いたものである。フランスのコンソーシアム活動に関しては、別の報告書を参考していただきたい。

今回の図書館訪問では以下の日程で合計 5 つの図書館を訪問することができた。訪問先と、主な面会者は以下の通りである。

日程	訪問先	面会者
2014年 10月6日	フランス国立図書館 (Bibliothèque national de France)	Mr. Franck Bardon Mr. Régis F. Stauder Ms. Véronique Béranger Ms. Mireille Ballit
10月8日	Bibliothèque Sainte-Geneviève	
10月8日	Bibliothèque Cujas	Ms. Sylvie Chevillotte
10月9日	La bibliothèque universitaire de l'Université Montpellier 2	
10月10日	Bibliothèque universitaire Droit Economie Gestion de Montpellier BU Richter	Ms. Marie Nikichine

1. フランス国立図書館 (Bibliothèque national de France)

フランス国立図書館²は 1,300 万冊の書籍や印刷物、約 25 万点の手稿類、35 万の雑誌コレクションを所蔵し、その他写真、ポスター、地図、楽譜、コインやメダル等を数多く収蔵している図書館である。パリ市内には 4 館、フランソワ・ミッテラン館、リシュリユー館、アルスナル館、オペラ座図書館・博物館がある。今回はパリ市 13 区にあるフランソワ・ミッテラン館、2 区のリシュリユー館を訪問した。

1.1. フランス国立図書館フランソワ・ミッテラン館

はじめに訪れたフランソワ・ミッテラン館は 1994 年に完成した近代的な建物である。本を模した 4 つの高層階とそれをロの字形に接続する低層階で構成され、フランソワ・ミッテラン館だけで、2 つの図書館の入口がある。16 歳以上であれば誰でも利用できる学習用図書館と利用に際して条件がある研究図書館の 2 つである。研究図書館の利用条件は、18 歳以上で研究機関に属し、フランス国立図書館の所蔵資料が研究に必要であるということで、申請書の提出が求められる。訪問した当日は月曜日で、学習図書館は終日休館、研究図書館は午後 2 時から開館であった。両図書館とも利用料³を支払わなくてはならない。

フランス国立図書館では同職員の Régis F. Stauder 氏が調整役として同行してくれた。同館は所蔵資料の電子化ポータルサイトで Gallica (ガリカ)⁴を構築しているが、そのコンテ



写真 1 フランス国立図書館
フランソワ・ミッテラン館外観

ンツである資料の電子化を行っている部署に案内してもらった。説明をしてくれた Franck Bardon 氏は、貴重書、手稿、絵、地図、楽譜等の電子化作業を現在行っている。

資料の電子化について、いくつか話を伺った。電子化する資料を見せてもらったが、いずれも 16～17 世紀のものであった。これまで書籍は標題紙以降が電子化の対象となってきたが、今後は表紙も電子化する予定であるという。また、電子化する際に気をつけているのは

色で、閲覧室で読まれる時の紙の色を再現することが重要だと話していた。

次にスキャナーを紹介してもらい、実際にデモンストレーションを行ってもらった。イタリア製とドイツ製のフラットスキャナーが2台置かれており、最大A0の大きさをスキャンできるといふ。解像度は600dpiで読み取っているとのことだった。現在はTIFF G4形式で保存しているが、2015年よりJPEG2000形式に保存フォーマットを変更する予定だといふ。JPEG2000形式はTIFF形式より容量が少ないので、年々膨大となるハードディスクの容量を抑えることができる。2014年11月には3Dで電子化を行うプロジェクトが始まるという。

この後、同図書館のMireille Ballit氏に館内を案内してもらった。Ballit氏は以前に、国立



写真2 フランス国立図書館
電子化作業風景

大学図書館協会海外派遣事業でフランスの電子化について調査した山口大学の木越みち氏を案内している。⁵

先述の通りフランソワ・ミッテラン館には学習図書館と研究図書館があり、月曜は学習図書館が休館日であったが、閉室されている学習図書館内を案内してもらった。主題ごとに書架と閲覧室があり、見学時は入館ゲートのメンテナンスや掃除などが行われていた。展示室は開室しており、数名の観光客が見学をしていた。

次に同建物の研究図書館へ向かった。開館の午後2時を過ぎた頃だったので、何人かの利用者がいた。閲覧席は静謐かつ相当な広さであった。情報検索やマイクロフィルム閲覧も行えるようになっていた。

最後にBallit氏はフランス国立国会図書館の納本制度（Legal Deposit）について話してくれた。フランス国立図書館で会った職員は、日本にもフランスと同様に納本制度があることに興味を持っており全員に質問された。フランスの納本制度は書籍などの紙媒体のみならず、Webコンテンツやテレビを含む映像資料もその対象に入っているという。フランスでは

INA (National Audiovisual Institute : フランス国立視聴覚研究所) という機関が、映像関係の納本制度に基づいてコンテンツを収集しており、フランス国立図書館の中にも INA の人員を配置しているそうである。



写真3 フランス国立図書館
フランソワ・ミッテラン館
閉室中の学習図書館

1.2. フランス国立図書館リシュリユー館

次に同じフランス国立図書館でもパリ市の中心地に近いリシュリユー館を訪れた。リシュリユー館では蔵書部写本課の日本コレクション担当 **Véronique Béranger** 氏に館内を案内していただいた。**Béranger** 氏は国立国会図書館の研修で日本に滞在していたこともあり、日本語を話すことができた。フランス国立図書館の写本課は以前、東洋と西洋で分かれていたが、人的リソースの関係から統合されて一つの部署になった。閲覧席は広く静かな空間で、利用者は必要に応じて書見台を用いて資料を閲覧したり、メモをとっていた。その閲覧席で、**Béranger** 氏から日本のコレクションを幾つか見せていただいた。江戸時代中期に複製された巻物や明治時代発行の独仏戦争の日本語訳本、ちりめん本などを紹介してもらった。現在所蔵されている日本のコレクションは、日本の国立国会図書館と共同で電子化を行っているという。また図書館では日本研究者の支援もおこなっているという。

電子化に関連して、日本のデータベースについて話を伺った。現在 **JapanKnowledge** の他はほとんど契約していないそうである。また、日本の古い書籍のメタデータが流通していないため、電子化してもその後の処理に時間がかかると話していた。

2. サント・ジュヌビエーブ図書館 (Bibliothèque Sainte-Genevieve)

サント・ジュヌビエーブ図書館⁶はパリ5区に位置し、パンテオンとよばれる霊廟のすぐ近くにある。1843年にアンリ・ラブルースト (Henri Labrouste) が設計した歴史ある研究図書館として有名である。この日はサント・ジュヌビエーブ図書館員の案内で、閲覧室を見学させてもらった。



写真4 サント・ジュヌビエーブ図書館
閲覧室

サント・ジュヌビエーブ図書館は、パリ大学に属する研究図書館であると同時に公共図書館も兼ねている点に特徴がある。18歳以上で利用でき、利用には登録が必要とされている。一方で建築物としても有名で観光地になっており、見学者も何人かいた。蔵書は貴重書を含む約250万冊、閲覧席が約700席の図書館である。開館時間は通常午前10時から午後10時までとなっており、当日午前11時頃で閲覧席は約6割が利用されていた。入館者は1日約1,000人だという。

所蔵資料の貸出は行っておらず、閲覧のみとしている。所蔵資料の電子化にも努め、現在はスキャンナビアの資料を電子化している最中だという。未遡及の所蔵資料もあるため、平行して遡及作業も行われているとのことだった。

3. クジャス図書館 (Bibliothèque Cujas)

クジャス図書館⁷は先述のサント・ジュヌビエーブ図書館にほど近く、歩いて数分の場所にあった。クジャス図書館はサント・ジュヌビエーブ図書館同様、パリ大学に属している研究図書館である。法学図書館として有名であるが、法学のみならず、経済学、政治学分野の資料も所蔵がある。現在の所蔵コレクションは19世紀から構築しているという。図書館はパリ第1、パリ第2大学に属しており、両方の所属者が利用できるようになっている。主な利

利用者は修士以上の学生で、現在 5,000 人が利用登録している。夏季になると海外からの利用が多いという。

見学時には Department de la Recherche documentaire の Sylvie Chevillotte 氏が館内を案内してくれた。クジャス図書館の通常の開館時間は午前 9 時から午後 9 時までで、所蔵点数は約 562,000 冊、そのうち 19 世紀の資料は約 10,000 冊あり、それより古い 16 世紀の資料は 500 冊程度、手稿類は僅かであるという。図書館内には 3 つの閲覧室があり、1 階の一番広い閲覧室には約 8 割程度の利用者がいた。閲覧席は決して十分な広さとは言えない印象で、利用者が互いに席を詰めて勉強をしていた。このほか 2 階、3 階にも閲覧席が設けてある。3 階の閲覧室では、博士課程の学生を対象にセミナーも開催しているという。

電子ジャーナルは現在 2,000 タイトルほど契約しているが、特に法学の研究者は冊子体を好む傾向があり、利用は全体でもまだ不十分ということであった。電子ジャーナルの利用を促進するため、電子媒体も契約している場合は、冊子体の配架場所に「電子ジャーナルあり」というサインをつくって提示している。この取組は訪問時にまだ始めたばかりということで、効果の程はまだわからないという回答だった。

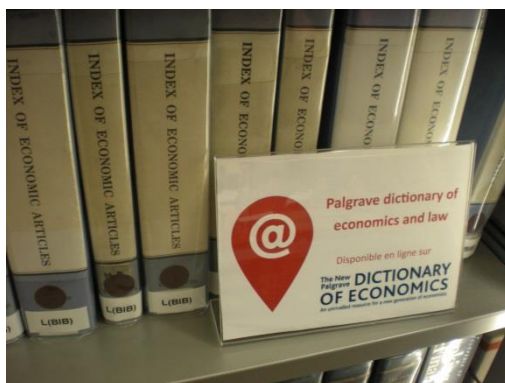


写真 5 クジャス図書館
同タイトルの電子リソース
があることを知らせる案内

クジャス図書館はパリ大学の学生だけでなく、国内の他機関の法学図書館員に対しても、法学資料の検索方法等トレーニングを開催している。また、法律家へも同様のサービスを行っている。

4. モンペリエ第 1 大学図書館 (Bibliothèque universitaire Droit Economie Gestion de Montpellier BU Richter)

モンペリエ第 1 大学図書館⁸は、その名の通りフランスのモンペリエ市にある。モンペリエはパリから約 350km 南下したフランスの都市で、ラングドック・ルシヨン地域圏の首府であり、中世から学園都市として存在していた。

モンペリエにはモンペリエ第1、第2、第3大学があり、第1大学は法学・経済学・医学・薬学、第2大学は理学・工学・数学、第3大学は人文科学・芸術学の分野に特化している。特に第1大学の医学部は13世紀に創設されたと言われている。なお、第1大学と第2大学は2015年1月にモンペリエ大学として統合された。

モンペリエ第1大学の図書館は、パリにあるクジャス図書館と同様に、いくつかの大学に所属しており、利用者はモンペリエ第1大学の学生でなくとも利用することが可能である。BIU (Bibliothèque Interuniversitaire de Montpellier) という枠組みで所属が異なるモンペリエ大学生が自由に BIU の図書館を利用できる仕組みになっている。そのためオンライン目録は図書館別ではなく、各館同じものを使用している。

モンペリエ第1大学図書館は、15年前にできた建物で、ガラス張り中心の近代的なデザインの図書館である。館内に入ると中央に大きな螺旋階段が特徴的で、天井も高く、1,500席ある閲覧席は木目調の落ち着いた色合いで、開放的な空間となっていた。この他にガラス張りのグループ学習室や個室等が設置されていた。

所蔵資料は特に法学・経済分野の資料の所蔵が多く、加除資料もたくさんあるという。図書館入口のフロアには20台のPCが設置しており、学生だけでなく、一般の利用者も認証なしで情報検索ができるという。



写真6 モンペリエ第1大学図書館
正面中央から左の建物が図書館である

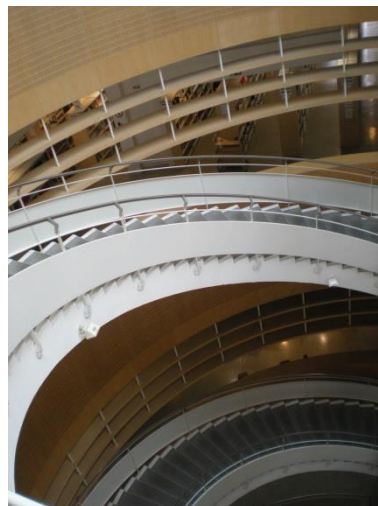


写真7 モンペリエ第1大学図書館
図書館内にある螺旋階段

5. モンペリエ第2大学図書館 (La bibliothèque universitaire de l'Université Montpellier 2)

モンペリエ第2大学図書館⁹⁾は、理学系の図書館でモンペリエ市街地から北東の方向に位置する。植物学の資料が多く、図書館を訪れる研究者は、これを目当てに来ることが多いと

いう。

図書館には約 500 席の閲覧席があり、開館時間は午前 8 時から午後 7 時（時期によっては 9 時）までである。図書館 1 階には入口正面に貸出・返却カウンターがあり、そこでレファレンスサービスも行っている。2 階は広々としたスペースに居心地の良さそうなソファが設置してあった。英語翻訳された日本のマンガ本があったので、その理由を尋ねると学部生に英語に慣れてもらうための工夫だと職員が答えてくれた。また、展示に力を入れており、BIU の中で巡回展示をしているという。

次に貴重書室に案内してもらい、当該図書館の貴重書について説明をうけた。植物学の資料が豊富ということだが、貴重書も植物学に関するものが多いという。約 3 年前から古い資料の電子化を行っているという。利用者の要求に応じて電子化する場合もあり、この場合には利用者にデジタルデータを提供した後、同時にインターネットで公開している。電子化事業はまだはじまったばかりで、これからもコンテンツを増やしていかなくてはならない、と担当者が言っていた。

次にカウンターの職員と電子ジャーナルや電子ブックの契約などについて話をした。フランスの大学は国立（または **public** と言っていたので公立とも表現できる）が殆どで、予算のほとんどが国からのものである。モンペリエ第 2 大学図書館の場合、電子ジャーナルをパッケージで契約する予算的余裕がないため、タイトルごとに契約しているものが多いということだった。しかし、ここ数年 ABES と Couperin の協力の下、電子ジャーナルのナショナルサイトライセンスが実現し、アクセスできるタイトルが増えたとのことであった。ABES の活動によって図書館全体のネットワークが良くなり、個々の図書館員の負担感が減ったと話していた。

モンペリエ第 2 大学図書館では見学時間が充分にとれたため、フランスの大学事情についても話を伺うことができた。フランスの大学は学部が 3 年、大学院は修士が 2 年、博士が 3 年の履修期間がある。モンペリエ大学では、学部生の授業は基本的にフランス語で行われることが多く、英語が必要になるのは修士課程に入ってからだという。そのため、学部生の時はフランス語での授業が中心だった学生も、大学院に進学すると英語が必要になるため、図書館では英語を学部生の早い段階から学習してもらえよう、図書館は英語資料の整備に力をいれていた。



写真8 モンペリエ第2大学図書館
外観



写真9 モンペリエ第2大学
図書館

6. まとめ

今回のフランス滞在では、1週間という短期間に計5つの国立図書館と大学図書館を見学する機会を得た。本来の調査目的は図書館ではなく、図書館コンソーシアムであったが、振り返るとフランスの大学図書館の実情も垣間見ることができた。図書館側からみたコンソーシアム活動についても知ることができて大変参考になったと思う。

フランスでは日本の大学図書館のように特定の大学の附属施設という枠組みではなく、1つの図書館が複数の大学に所属していたり、研究図書館であると同時に、公共図書館であるという色々な側面をもつ場合があることを初めて知った。日本の大学図書館と同じと思いついでフランスを訪れたため、最初はそのしくみを理解するのが難しかった。

研究図書館、大学図書館といわれる図書館を訪問して、まず感心したのは閲覧室の静謐さである。筆者が訪れた図書館のフロアにはたまたま存在していなかったのかもしれないが、日本でも導入が進んでいるアクティブ・ラーニング・スペースやラーニング・コモンズといったような空間を見つけることができなかつた。食べ物や飲み物の持ち込みは禁止され、職員同行の館内見学とはいえ、写真撮影も断られることがしばしばあった。利用者が資料の閲覧、勉強、研究に集中している姿、またその空間を維持しようとする図書館の姿勢がとても印象的だった。

フランスも日本と同様に、分野にも違いはあるだろうが、学部生のうちは母国語での授業がほとんどを占め、修士に進学しないと英語を本格的に使わないということも分かった。フ

ランスでは良い職に就くためには、修士以上の学位が必要とされるらしい。修士以上だと本格的に英語を修得するので、語学力も良い職に就くための要因になるという。

フランス国内の資料等の電子化に関しては、国立図書館の Gallica がさまざまなコンテンツを集積しているので進んでいる印象を受けたが、個々の大学図書館レベルになると、人的、財源的制約もあってか、それほど力をいれているようには見えなかった。むしろ、国が中央で電子化をすすめ、インターネットを通じて利用を促す一方、公共、大学図書館は伝統的な図書館の環境を維持しつつ、冊子体の提供等に力をいれている印象を受けた。つまり、電子化とその提供は中央（この場合国立図書館）で、従来の図書館機能はそれぞれの地域の図書館で、というような役割が分かれているのではないかと考えた。

これからますます資料の電子化等が進む世界で、フランスの図書館はどのように変化していくのか、伝統的な図書館を維持しつつも、新しい取り組みを行っていくのか、フランスの電子化と図書館の関係については今後全体像を把握する必要があると感じた。その経過を今後も追っていきたいと思う。

最後に今回のフランス派遣に関して、沢山の方のご尽力をいただきました。改めてお礼を述べさせていただきます。ありがとうございました。

-
- ¹ フランスにおける大学コンソーシアム(Couperin:Consortium Unviersitaire des Publications Numeriques)活動の現状に関する調査に関しては以下の報告サイトを参照されたい。また、『大学図書館研究』に今後投稿予定である。
国立大学図書館協会.“国立大学図書館協会海外派遣事業 活動実績”. (オンライン), <http://www.janul.jp/j/operations/overseas/result.html#H26-2>, (参照 2015-2-21).
 - ² Bibliothèque nationale de France. (online), <http://www.bnf.fr/>, (accessed 2015-02-21) .
 - ³ 例えば研究図書館だと、3日間の利用で8ユーロという料金設定がある。利用期間は、3日間、15日間、1年間の設定があるようである。
Admission to the reading rooms and reader's cards rates.(online), http://www.bnf.fr/en/bnf/admission_and_rates/s.admission_to_reading_rooms_research_library.html?first_Art=non, (accessed 2015-04-21) .
 - ⁴ 1997年にフランス国立図書館が開設した電子化資料の公開ポータルサイトである。
Gallica. (online), <http://gallica.bnf.fr/?&lang=EN>, (accessed 2015-04-22) .
 - ⁵ 平成23年度国立大学図書館協会海外派遣事業参加報告書. (online).
http://www.janul.jp/j/operations/overseas/report_h23_3.pdf, (accessed 2015-02-21).
またフランス国立図書館の電子化事業に関しては木越氏の以下の報告を参照した。
木越みち. フランスの図書館における資料電子化の動向とその提供方法. 大学図書館研究. 2012, no. 95, p.1-11 (オンライン),
<http://www.jcul.jp/ojs/index.php/daitoken/article/download/95/62>, (参照 2015-2-21).
 - ⁶ Bibliothèque Sainte-Geneviève. (online), <http://www-bsg.univ-paris1.fr/>, (accessed 2015-02-21) .

-
- ⁷ Bibliothèque interuniversitaire Cujas. (online), <http://biu-cujas.univ-paris1.fr/>, (accessed 2015-02-21) .
- ⁸ Bibliothèque universitaire Droit Economie Gestion de Montpellier BU Richter, (online), <https://www.facebook.com/pages/Biblioth%C3%A8que-universitaire-Droit-Economie-Gestion-de-Montpellier-BU-Richter/179876588724557>, (accessed 2015-02-21) .
なお、モンペリエ第1大学図書館独自のホームページではないが、BIUのウェブサイトとして以下も参照してほしい。
Bibliothèque interuniversitaire de Montpellier. (online), <http://www.biu-montpellier.fr>, (accessed 2015-02-21) .
- ⁹ BU Sciences - Université de Montpellier, (online), <https://www.facebook.com/pages/BU-Sciences-Universit%C3%A9-de-Montpellier/251460301589302>, (accessed 2015-02-21) .

[Report]

Report on 2014 Overseas Visit Program by Japan Association of National University Libraries : the Visits to the French Libraries

Shibata, Yasuko.

Library System Section, Library Affairs Division, Department of Libraries and information,
Hitotsubashi University